

話題：水文学会設立の背景、設立趣旨とその後—要旨—
福島大学共生システム理工学類 虫明功臣

私の学生時代、1960年代中ごろ、水文学は、水理学の先生から“みずぶんがく”と言われていました。水理学が水の動きを主に力学で記述する“手法オリエンテッド”な分野で明確な学問領域を確立しているのに対して、水文学は水循環という“対象オリエンテッド”な分野で当時は未だ概念や論理を文章で記述する面が多かったからだと思います。水循環機構の解明にはどんな手法でも使うという、この対象オリエンテッドな性格が、前世紀後半から今日まで国内的にも国際的にも提起されたさまざまな水問題を追い風として、水文・水資源学の今日の隆盛のバックグラウンドになっていると言えます。

<学会設立へ向けての背景>

- ・ UNESCO「国際水文学 10年計画 (IHD)」(1965~1975年)：工学、理学、農学など異分野の水文学関係の研究者がシンポジウムの開催、研究グループの組織などによる交流(日本学術会議・陸水研連が中心的役割)。1975年 IHDの締めくくりにシンポジウムを東京で開催。
- ・ 1976年から「国際水文学計画 (IHP)」として継続。
- ・ 1977年 第1回「水資源シンポジウム」：日本学術会議・水資源研連が主催、水関連学会と水関連省庁が共催。その後、5年に1回開催、2007年に第7回。
- ・ これらを通じて、異分野間での水文・水資源に関する交流が深かまる。
- ・ 1985~6年当時、土木学会水理委員会水文部会で水文・水資源を中心にした学会を作ること検討。それが契機か？ 1986年 理・工・農の水関係の大学の先生が京大・防災研で会合、学会設立へ向けての準備会を指名。準備会委員：池淵修一、市川 新、小川 滋、小林慎太郎、中村良太、西尾邦彦、近藤純正、福嶋義宏、虫明功臣。約2年間の熱い準備活動、特に、関連行政機関や民間企業をインボルブする活動。

<設立趣旨の4つの柱>

- ① 学際的かつ総合的研究を重視する。
- ② 新技術の開発・応用など、創造的、先導的研究を重視する。
- ③ 基礎的研究の重視はもとより、実際問題への適用を図るために、学・官・民の研究者・技術者の交流を促進する。
- ④ 国際的な交流と協力を積極的にはかる。

<設立後の効果に関する私見>

- ・ ①、②、④については、目覚ましい成果。新しい課題に挑戦し、若手が育ち、異なる母体の研究者の顔が互いに分かるようになっている。
- ・ ③の“問題解決型研究の推進、実社会への貢献”については、成果が見えにくい。社会貢献はそれぞれの会員の出身母体の学会で行う傾向(縦割り行政に対応した縦割り学会)。統合水管理、流域管理などで総合的に政策・施策提言ができる学会になれないか？